

故大谷瑩誠學長殿を憶ふ

故大谷學長先生が宗門に盡された功績の如何ばかりであつたかについては、私は多くを知らない。ただ私は故學長先生が我々の大谷大學に寄與せられた事々の一端を述べて故學長先生を追憶する便りとしたい。

私が本學の前身眞宗大谷大學へ入學したのは大正二年九月であつて、私はこの現校舎が洛北のこの地に落成した始めての入學生の一人であつた。東京巢鴨にあつた眞宗大學は、その三年前、親鸞聖人の六百五十回御遠忌が明治四十三年に營まれたその翌年の秋、京都に移轉せられて、二ヶ年間は舊高倉大學寮に假校舎の形であつたのであつたが、六百五十回御遠忌の御威勢に由つたのであらうか、大正二年九月にこの現校舎が華々しく落成し、十月十三日の開校記念日には内外貴顯を招いて盛大な落成式が舉行せられたことを記憶する。東京巢鴨の眞宗大學も清澤先生の精神が浸透した宗教的性情の豊かな學園であつたと聞いてゐるが、京都に移りこの校舎で新たに出發した眞宗大谷大學は、當時日本の佛教學界に於ける最高の權威であつた派内の碩學諸教授諸師と、京都帝國大學文學部から本學講師として迎へられた西田幾太郎、松本文三郎、坂口昂、柳亮三郎、朝永三十郎、米田庄太郎等の諸先生

とを中心とした講義で充實せられた、聖新な希望をはらんだ學園であつた。いふまでもなくそれが擴大せられ大學令による大學となつたのが現在の本學である。

山口 益

京都へ移され、そして新しい眞宗大谷大學がさういふ發足をした當面の責任者は、故學長先生の御令弟である當時の東本願寺教學局長故淨曉院大谷瑩亮師であつて、淨曉院師は京都へ移された數年間、この眞宗大谷大學の基礎のかたまふ頃まで本學の學長を兼任せられたのであつた。そして六百五十回御遠忌當時の宗務總長は申すまでもなく、故大谷瑩誠學長殿であつた。それ故に故學長先生が故淨曉院師と共に、京都に於ける本學が新しく發足し、その基礎のかたまふまで、宗務總長の責任に於て、本學の行くべき道について、甚深の配慮をなされたことが偲ばれるのである。事實の程はそれを存知しないが、佐々木學長は屢々深更まで、先に本學の學長であられた故淨曉院師と、一派の教學を中心とする重要な問題について審議を遂げられたと承はるのである。故學長先生が、直接間接さういふ重要な問題の處決について、佐々木學長や淨曉院師と交渉をもつて居られたことはいふまでもなく、佐々木學長が表面に立つて大谷大學の直接の經綸にあたられた背

後には、故學長先生が事實上の顧問としての役目を果して居られたのではないかと憶ふ。

故學長先生が佐々木學長を如何に信任せられ、佐々木學長の經綸下にあつた大谷大學を如何に支援して居られたか。佐々木學長に對する故學長先生の性情の一端として私はかういふ話を聞いてゐる。故學長先生は大正十四年の頃フランス國巴里に滯留せられ國民圖書館(Bibliothèque Nationale)に於て支那古文書特に敦煌古文獻の研究に専念して居られたのであつたが、その頃、現京都大學文學部長本田義英博士も巴里にあつて國民圖書館で梵語の古文獻の調査をして居られ、國民圖書館の寫本室で昵懇の間柄であつた。そのとき佐々木學長病歿の電報が故學長先生の巴里の寓居へ京都から届いたのであつたが、故學長先生が愁傷せられたことは側の見る眼にも御氣の毒な程で、「本田さん、佐々木學長を失ふた大谷大學は一體どうなるでせうか」との悲歎の言葉を度々漏らされ、憂鬱の數日を過されたといふことであつた。

まことに佐々木學長が大谷大學經綸の理想は、佐々木學長の追悼會が今日と同じやうにこの講堂で靜かに営まれたとき、參列せられた故西田幾多郎博士や鈴木大拙先生が、交々追悼の言葉を述べて、かへすがへすも惜まれたやうに、「佐々木學長の理想は、當時の流行であつた専門學校の大學昇格としての大谷大學ではなくして、世界に於ける佛教研究の模範的な學園を形成しようとの意味をもつてゐた」のであつた。そして佐々木學長の理想はまた同時に故學長先生の大谷大學經綸の抱負であつて、そこに故學長先生と佐々木學長と肝膽相照するものがあり、本願寺の内部に奥深

く鎮まりつつ佐々木學長の果たされんとした使命の完遂を支持せられたものであつた。

私が始めて故學長先生に面接を得たのは、故學長先生が大正十五年の夏フランスから歸朝せられて、その歡迎茶話會が東本願寺白書院で催されたときのことである。そのとき故學長先生の報告談の中に「自分が今回歐洲へ參つて歐洲の佛教研究事情を見るに、前回に歐洲に滯留したときは、歐洲の佛教研究が餘程本格的に進んで居たことを認めたのである」とのことであつた。

故學長先生は明治四十年代の初期に京大文學部の選科生として、當時に於ける日本支那學の重鎮であつた内藤湖南、狩野君山諸先生について支那學を修められ、大正十三年に歐洲に滯在せられたときは、恰も内藤湖南先生が巴里で、現京大文學部講師石濱純太郎先生と共に敦煌の古文獻を調査せられたときで、故學長先生もそれらの諸先生と研究を共にせられ、その研究の一業績として敦煌古寫本大無量壽經五惡段の斷簡を、内藤湖南先生の跋文を付してコロタイプ版で出版せられた。今となつてはまたなき好個の記念物である。がしかし故學長先生は、専門の支那學に對してだけでなく、印度學としての歐洲の佛教學界の事情にも注意せられ、白書院での報告に於ては向らその方についての物語があつたのである。

私はその翌年昭和二年の始めに歐洲へ渡り、まのあたり彼地の印度學特に佛教研究の事情を學び得たのであつたが、一九一四年から一九一八年に互る前回の歐洲戰爭と第二回世界戰亂との間の二十餘年間に於ける歐洲の佛教研究は、まことに故學長先生の報

告談に述べられた如く、大乘佛教の本格的な部門に迫つてゐた。フランスのシルヴァン・レヴィ (Sylvain Lévi) 、『ベルギーのドゥ・ラ・ブリー・プーサン (de La Vallée Poussin) 、『オランダのライムン (Johannes Rahder) 、『ソフィエットのチホルベンキ (Th. Scherbatsky) 、『並びにオバーミラー (E. Obermiller) 、『イタリヤのテネチ (G. Tucci) 、『ポーランドのシヤヤー (Stanislaw Schayer) 等諸學匠の研究は、何れも大乘佛教の重要な部門に關する資料並びに論攷として表はれ、現在ドゥ・ラ・ブリー・プーサンの弟子ラモット (Étienne Lamotte) 教授の如きは、龍樹の智度論百卷に對する佛譯の完成出版中であるのである。プーサン、ラモット兩教授はベルギー國に於けるカトリック系大學の教授であり、殊にラモット氏の如きは *abbé* であるが、「さう云ふカトリック系の大學に於て、佛教破析の爲に佛教の根本的な研究が敢行せられてゐるといふことは、カトリック教徒の上に傳統として流れる殉教的精神の表はれでないであらうか」とは故學長先生が時あつての述懐であつた。

それら歐洲の佛教學者であつて故學長先生と面識をもつた人々の中には、先生の好學的な志向にひきつけられるものがあつたのであらうか。それらの學者で戰前日本へ來朝した人々は屢々學長先生の邸を訪れたことであつた。オランダ國ライデン大學教授ヨハンネス・ラーデル氏は毎夏日本を訪れる度に嵯峨對嵐山房に故學長先生を訪れて歡談終日盡きることなく、ギユメー博物館長でアフガニスタン佛教古跡研究の最高權威であつた故ゼヨセス・アツカン (Joseph Hackin) 氏等も對嵐山房を訪れて秋色深き保津

川の勝景を愛でつつ種々談合の行はれたことであつた。ラーデル氏 (現エール大學教授) は戰後の第一信に故學長先生の安否如何を尋ね、本年一月にもたらせた近信には「My respectful regards to Mr. Eisei Otani, President of OTANI DAIGAKU, I hope he will live long!」と記して故學長先生の健在を祈念したのである。

故學長先生は佛敎學の専門學者ではなかつたけれども、佛敎學が如何にあるべきかについては常に嚴正な批判を吐露せられた。「大谷大學の佛敎學が、たとへ現在如何に輝く成績を示してゐるにしても、單に立派に輝いてゐる成果のみに眼が眩んで基礎學を修めることを忘れるべきでない。常に基礎學から築き上げることが忘れられるならば、現在の成果を以て終りを告げて、大谷大學は將來に於て寂滅する他はないであらう。佛教の基礎學としての俱舍唯識華嚴天台等の諸敎學が堅實に學修されねばならぬのではない」とは、故學長先生から度々承つた言葉である。

逝去せられた前日、學制審議會の席上で故學長先生は東京の宗門關係の諸大學が、來るべき新制大學として佛敎學部の他に數多の學部を開設する計畫のあることを耳にせられて、「それらの諸大學の如きは最早や佛敎の研究に本腰を入れることを始めから避けて、佛敎學部は御添物の如くなつてしまつてゐる。他の學部のことなど考へずに、佛敎一學部だけで新大學の設立を計畫するとならばそれはどう云ふ構想をもたねばならぬであらうか。そこに本眞の佛敎大學が考へられるのである。さはさりながらそれを完遂することこそ最も重要であり、而も困難であらうか」と。その

言葉の中に我々の大學が如何に立ち上つてゆくべきかの意味が指示せられてあると思ふ。

故學長先生の佛教學に對する所見には、かくの如く凌嚴なものがあつたのである。

故學長先生は、かくの如く佐々木學長の時以來、否、それ以前の京都に於ける本學創設以來、常に教學の中心問題としての本學のあるべき姿について思念せられたものであつた。昭和七、八年頃から六、七ヶ年の間、本學は教學的に新たな動きのなかつた時期であつたと記憶する。その間にあつても故學長先生は常に大谷大學の復興すべきあり方等について、本願寺の奥にあつて苦慮せられたのであつた。既に日本に軍國の非常時が叫ばれ、文化系諸學が抑壓せられかけた當時にあつて、名畑教授が中國及びフランス國に、龍山助教授が獨逸に、夫々在外研究員として旅出されたのは、全く故學長先生の根強い支援によるものであつた。故赤沼教授はその時、「かういふ非常時に於て相次いで二名も在外研究員の派遣せられ得ることは只ならぬ欣幸事である」と心から喜ばれたことであつた。

燃ゆるが如き本學に對する熱愛と、凌嚴にして寸毫も許すことなき批判とをもたれ、而もそれらを胸にひめて靜かに歴史的な形成を期して居られた點は、一には故學長先生の處せられたその地位の爾らしむる處であつたのであらうが、又一つには、明治三十六、七年頃イギリス留學の間に身につけられた英國流の紳士的な風格の致す處でないかと思ふ。そしていま新制大學へ切り替へらるべき重大なこの時期に於て、こころ痛まされることが多い中に、

自分が長く手しほにかけて育成して來られた本學の學長室に於て職に罷られた。それはそれはまことに痛惜の極ではあるが、同時に聖なる素懷の成就とも申すべきことであらう。ただ由來、本學學長は本學のために不惜身命の道を實踐せられた方々の多いのに今更ながら思ひを致さざるを得ない。清澤先生申すに及ばず佐々木先生も亦固よりさうであつた。

私は終りに一言に申し添へたい。本學の京都移西に引續き、本學のこの校舎の設立を始め京都に於ける本學の基礎を築き上げるまで表面の責任者であられた故淨曉院師は、晩年暫時病床に伏して居られたが、病氣のひまに病軀車に乗られ、寺町今出川北の自邸から出られて北へ向はせられた。そして本學の近くまで車を進めて遙かに本學の姿が見える位置まで來られたとき、もう良いから宅へ歸れと運轉者に命じて急遽歸邸せられたと聞いてゐる。數々の配慮を致して築き上げられた本學の姿が病中の淨曉院師の念頭を去らず、「もう一度一目見て」との心情で居られたのであらう。それは人間としての限らない愛執であらうが、同時にそれは、本學を護念せらるる念力のあらはれであると了承せらるるであらう。私は、本學が歴代學長のさうした念力に護られ、またさういふ念力が常にまのあたり仰がれるやうな本學のあり方を念願して、この追憶の言葉を了ることとする。

本稿は昭和二十三年五月十八日、故大谷學長先生三七日忌に大谷大學講堂で營まれた追悼法會に於ける追憶談の梗概である。